

超有識者場外ヒアリングシリーズ ㉑

主計局主計官 神田 真人

クールジャパン編

作詞家 秋元 康氏
(AKB48総合プロデューサー)

profile—

秋元 康 AKIMOTO YASUSHI

1958年、東京都生まれ。作詞家。TV、映画、CM、ゲーム、マンガなど、多岐にわたり活躍中。国民的アイドル“AKB48”グループの総合プロデューサーを務めるなど、常に第一線で活躍するクリエイターとしても知られる。2008年第41回日本作詩大賞、12年第54回日本レコード大賞“作詩賞”、13年2月第40回アニメ賞長編アニメ部門“音楽賞”を授賞。

神田 真人 KANDA MASATO

主計局主計官。1965年生まれ。1987年東京大学法学部卒業、91年オックスフォード大学経済学修士(M.Phil)。十和田税務署長、主計局主計官補佐(主査)、国際局為替市場課補佐、大臣官房秘書課企画官、世界銀行理事代理、主計局給与共済課長等を経て2010年より主計局主計官。元オックスフォード日本協会会長、(財)浩志会本会員代表幹事等。



右：秋元 康 作詞家

▶**神田主計官(以下神田)** 本日は大変に御多忙のところ、貴重な御時間を頂き誠に有難うございます。秋元さんにはクールジャパン等で御指導賜って参りましたが、今日は、是非、仕事の仕方、ひいては生き方も含めて幅広くお話を伺いたく存じます。勿論、先生には多くの御著作から力と知恵を頂き、感謝しておりますが、それだけではありません。先生にはアンビバレント(両義的)な存在の魅力がある。即ち、創造の天才vs堅実な努力家、予定調和と破壊論vs常識的な価値観といったものが共存している。例えば、「皆が考えないことをやれ」「最大公約数は駄目だ」と叱咤しつつ、企画を通すには現実的に「信頼を得るべく実績を積んでいくしかない」と極めてオーソドックスな正攻法も仰っています。ここが興味深く、もっと学びたいと思った次第です

(AKB学校と人材育成)

▶**神田** さて、予定調和を壊せ、差別化をし、

ファンに突き刺さるようなことを24時間考えろ、といった秋元さんの基本哲学は、様々な著作で承知していましたが、この2月のNHKBSプレミアム『密着! 秋元康2160時間』でその徹底ぶりを映像でも拝見しました。

特にメンバーへの競争の負荷は凄まじい。しかし、これが人材育成の学校になっていることに注目しています。田原総一朗さんとの対談『AKB48の戦略』で「内野ゴロでも全力でファーストに走ってヘッド・スライディングする姿」に象徴される「高校野球」と定義づけられていましたが、誰にでも門戸は開いているが芸能界で進学率トップの女子高というのが面白い。そこでは、根性で強くなるだけでなく、社会規律が自然と身につく、立派なリーダーも育成すれば、起業家まで輩出する。宝塚が様々な分野に優秀な人材を供給していますが、それとも違う新たな労働市場、生きる道を与えています。

しかし、学校の成功には、やはり最初の採用も

大事だと思います。先生は「完成している人材はAKB48向きではない」と仰っていますが、逆に、どんな子だったら採用して育てよう、という基準はないのでしょうか。

▶**秋元氏（以下、秋元）** 基準のようなものは何もないんです。まず自分のことを話しますね。

僕は54歳になりましたが、実は昔、大蔵省に入りがかったのです。丁度、僕達の時代は受験戦争が盛んになってきた頃で、開成中学、開成高校に進み東大に行こうと思っていました。しかし、受かると思っていた開成中学に落ち、自分より成績が悪くて僕が勉強を教えていた同級生たちがみんな開成を初めとする進学校に合格しました。その時、世の中には不条理があるんだなと思いました。これを「半ズボンの挫折」と自分で呼んでいます。できれば神田さんのように官僚になって大蔵省で仕事をしたかったという人生が一方にありながら、そうではない自分は、アルバイトを続けている感覚で仕事をしつつ、いつでも高校時代の自分の勉強部屋に戻れる、あの頃に戻れるというつもりで30代、40代まで仕事を続けてきたんです。今でも思うのですが、ふと目が覚めたら高校2年に戻っていて、作詞家になる夢を見ていた、ということがあるんじゃないかと……。

そして、仕事の話になりますが、仕事には、何も判らないままやることの面白さと何も判らないから新しいことができるということがあるので。もし、僕が専門学校にいったらテレビとは何か、番組とは何か、作詞とは何か、ということを学んでいたら、多分、先人の轍を踏むことになると思います。ところが僕の場合は何も判らないまま作ってきたから好きなことができた。

面白がってやっていくうちに先人達のことをふと振り返ったり、学ぶとずっと効率のいいやり方があったと気づく。だから、初めは感性で飛び付き、後で学んでいく。これはすごく大事なことでアートの世界でも何の世界でも、技術から入らないで、まず自分のやりたいことがあってそれをするためにはどうしたらいいのか考えろと言っています。勉強でも、やりたいことのために勉強が必

要なんだと考えることが重要だと思います。

AKBは他のアイドルグループよりも敷居が低いと言われているが、ごく普通の女の子に入って欲しかったからです。もちろん最低限の基準みたいなものはありますが。僕達がやっているオーディションは僕が全部決めるのではなくて、審査員がいいと思う子は入れろと言っています。僕がいいと思う子、プロデューサーやディレクターがいいと思う子、それぞれ違うじゃないですか。そういう中で今度は彼女たちがやりたいことを見つけようとするようになる。例えば歌手になりたい子はどうやったらもっと上手くなるか、歌詞のニュアンスを表現するにはどうしたらいいのかとか、あるいは女優になりたい子はチャンスが巡って来たらお芝居をするようになるし、あるいは最初は何も目指したいものはなかったけどAKBという場でアニメの声優とか新たなものを発見する子もいる。若い時に夢を持てとよく言われるけれど、それはとても難しいですよ。まずは、夢が見つかる畑に入らなければいけないと思います。

▶**神田** その畑を創られたというのが素晴らしいと思います。特にハングリー精神がない時代と言われるなかで彼女たちが頑張っている姿が美しいからみんなが見たがるし、ついていく人がいるのでしょう。ただ、かなりリスクのある選択だと思います。秋元さんは『企画脳』等で「根拠のない自信」、ポジティブ思考が大切と仰っています。AKBに入ると、厳しい訓練に耐えたことが根拠となっていくと思われそうですが、そもそも、AKBに挑戦しようとする段階で、熱意だけでなく、一定の自信が必要なはずですよ。何が最初の原動力になるのでしょうか。

▶**秋元** やっぱ、縁ですね。全てのものは縁が一番大きいと思います。こうして神田さんにお会いできているのも何かの縁ですし、また違う場所でお会いして、あの時インタビューしたんですよということもあるかもしれない。世の中は、そういう縁で回っていて、例えばAKBを卒業した前田敦子という女の子は人見知りですが学校も面白く感じ

られなくて、たまたまお母さんと歩いている時にAKBの募集のポスターを見つけたのです。でも秋葉原でやるというのは怪しげですね。唯一の手がかりはお母さんがこの“秋元康”という人を知っていることだけで、なぜその時受けたいと思ったかは分からないけれど、人見知りでそんな絶対嫌だった彼女が初めて受けてみたいと思ったわけですね。それが縁だと思います。

多くの場合、自分の将来や仕事は何かの縁で、例えばたまたま近所にギターの上手いお兄さんがいてギターを教えてもらってミュージシャンになったとか、たまたま知り合いが大工さんで大工さんを目指していたら建築家という職業を知ってこれが面白いなと思ったとか、すごく些細なことだと思うんです。我々はAKBに集まる子達はその些細な一つ目の階段をあがった女の子たちだと思っています。ドアを開けた女の子たちとでも言いますか。

先程、神田さんが仰っていましたが、なぜ僕がアンビバレントなのか。壊す、つまり新しいことをやるとすごくコンサバティブに惹かれる。何も知らないから壊すこともやるけれども、新しいことをやっている時に振り返ると実は大切なことは不変的なことであると感じる。

AKBの歌も不変的ですよとか、友情とかベタベタですよとか言われますがやっぱり時代というのはケーキみたいなもので、その時々においてデコレートされるものは変わってくる。僕のころはイチゴのショートケーキだったけれど、グレープフルーツになったり、パッションフルーツになったり、でもスポンジの部分は変わらないじゃないですか。そのスポンジの変わらない部分がおニャン子クラブであったり、モーニング娘。であったり、AKBであったり。だから多分傍から見ると、すごく新しいことをやっているように見えるけれど、他方で、秋元さんの歌詞をよくみるとベタですよとか王道ですよとか言われるんです。AKBはたかがアイドルだけれど、よく見てもらうと、“教育の場”でもあると思うんです。

▶神田 生存をかけた国際競争の激化にもかかわ

らず日本人の精神力が衰弱していると言われる中、この乱世で生きていこうと思ったら、仮に芸能界で生きていかなくても、芸能界の競争で鍛えられた精神は社会に出て役に立つと思います。他方、最近厳しい嫉妬はいけないみたいな誤った風潮もあり、どの程度の負荷が適当か悩ましいところです。

▶秋元 それはすごく難しいところですね。例えば、AKBは、今までの芸能界、今までのアイドルを可視化させたっていうのが一番大きいと思います。芸能界は毎日が選挙なんですね。音楽でベスト10に入れば誰かが落ちるし、ドラマで誰かがキャスティングされれば他の誰かが落ちるし、でもそれは日々見えないところで行われているわけですよ。それをAKBは、年に一度お祭りのように、オールスターファン投票みたいな、夢の球宴・野球のファン投票みたいなものを持ち込もうとしたんですけれども、結果競うことになったんです。この競うことはすごく難しいですけれども、非常に大事だと思うんです。しかし、今は徒競走でも同時にゴールさせたり、順位を付けることがよくないと思われている時代です。可視化しても競争原理は働いていないということならば、それはおかしいので、やはり、競わせないといけないと思いました。センターになりたかったら努力するわけですから。

残念ながら芸能界では努力だけでは生き残れないんですよ。それは例えば運だったり。結局、努力×変数とすれば、この変数は何なんだみたいなところがあるので、それが可哀そうだなと思います。

それでも、競うということがAKBの原則です。例えば、一人っ子の家庭より兄弟が何人もいると、おやつでも御飯でも、あるいは寝る場所でも競争することがあるじゃないですか。それに近いところがあると思います。しかし、だんだん世の中ではそういうところが許されなくなったりしています。タレントの話はマネージャーが聞きますが、AKBは学校のようなところなので、タレントとマネージャーではない関係が必要になってくるの

で、今、AKBでは、専従の臨床心理士やスクールカウンセラーが24時間ついています。そうすると家庭のことだったり、夢と現実の話だったり、学校と仕事の両立だったり、もしかしたら身体的なことだったり、そういうメンタルをケアすることが今のAKBには必要になっていますね。

また、AKBに負荷をかけているように思われることもある。しかし、本人の自主性に任せ、本人に判断させないといけない。本人が人生で判断をするということがすごく重要でAKBでいえば初めてオーディションを受けるということがひとつのチョイスかもしれない。あるいは今年の選挙を立候補制にしたのも、選挙はお祭りなんだけれども例えば順位が不安な人とか、そういう人は別に立候補しなくてもいいし、お祭りに参加するだけでもいいんじゃないかということです。教育はやっぱり難しいですね。

▶**神田** 実は私、前任が文部科学予算担当で教育改革をやっておりまして、AKBでやっておられる実験というのは相当にレリバントであり、色々悩みながらもひとつのモデルをつくっておられることに関心をもっておりました。なかなか世の中との関係が大変だったのではないかと推察されます。

▶**秋元** やっぱり世の中というのは、“その他大勢の人たち”が多すぎて難しいなと思いました。みなさんの仕事、政府の仕事は難しいなと思うのは、昨日もクールジャパンの会議に出席しましたが、とにかく日本がクールジャパンを全力でやるためには、日本を代表するクリエイターが国策として集まらないとダメだと、つまりドリームチームをつくらないとダメだと申し上げました。例えば、日本酒を大使館やパーティーでもっと配ってほしいとかありましたが、それでは埒が明かない。なぜなら各国が色んなものをそのパーティーでやっているわけだから。僕が思うに、日本酒の優位性を考えると、他の酒に比べて日本酒は温度の違いを楽しめる酒なのだから、温度というものをキヤッチコピーだったり、飲み方だったり、あるい

は品質だったり、プロの一流の方に考えてもらう。それは例えばドリームチームがノーギャラでやるくらいの意気込みがないとだめですよと言ったら、“ノーギャラ”という言葉だけに反応して、「秋元はみんなに無報酬で働かせるのか」というふうに思われてしまいました。また、AKBを3月11日に東北の10カ所に6人ずつ派遣してライブを行ったんですよね。もちろん慰霊祭とかあるので、地元と丁寧話したうえで、慰霊祭が終わってから行きますというように全部慎重にやったのですが、一部の方からは、なぜその日に来るんだとお叱りを受ける。ただ、それで子どもたちがすごく喜んでくれる、あるいはAKBが動くことでメディアが取材してくれて震災のことが風化しなければ、そっちの方がいいと思うのだけれども、批判されてしまう。多分、みなさんも同じでしょうけど、何か善意でやろうとしても批判がでてきて大変なのではないでしょうか。

▶**神田** 大変です。でも、民主主義ですから、みんなにご理解を頂いて正統性を得なければ国民のためにやるべきこともできない。そこは民主主義のコストであり、是非もなく、所与のものだと思っています。

▶**秋元** 反対意見は必要です。ただ、クレイマーのように非難するだけでは何も生まれないと思うんですね。

▶**神田** 私益を相対化し全体を見据えた堂々たる議論が減ってしまった、妬みや既得権益が裸で節操なくてでくるようになった、情報革命の結果、浅薄な、或いは無責任な情報が氾濫するようになったといわれています。

話を戻しますと、宝塚は多様な人材養成学校で、政治家まで様々な分野で立派な方を輩出しておられますけれども、AKBの子たちが色んな業種に散っていくと面白いと思います。

▶**秋元** 多分そうなると思います。理想は、行儀見習いみたいな学校です。例えば、カメラマンに

なりたいたいという子がAKBに入ってくるとします。カメラマンだから関係ないじゃないかと思うんだけど、ここで歌ったり踊ったりすることでエンターテインメントとは何かとか、何を望んでいるのかとかそういうことが体感できるんです。高橋みなみが政治家になるかもしれませんが、人を纏めるということをAKBで覚えるかもしれない。全然関係なかったところからそういう人を輩出するようになったら面白いと思います。

▶**神田** 秋元さんがどう評価されているか分かりませんが、AKBを辞めて起業した子もいましたね。

▶**秋元** 川崎ですね。元々アパレルが好きで。他にもパティシエになろうとしている子とか、いろいろいますね。あとは、AKBでどれだけコネクションをつくるかというのがありますね。ヨーロッパの全寮制の学校の良さは、そこで培ったコネクションが将来役に立ったりするわけですから、そういうところがAKBにもあると思うんです。

▶**神田** 私もオックスフォードでカレッジ内の寮に住んでいたんで、一緒に学び一緒に暮らし、様々な世界に飛び立っていった友人達のネットワークは格別だと思います。

(企画脳と仕事術)

▶**神田** 次に、仕事のやり方を教えてください。AKB劇場の初日はお客さん7人で興行的には散々、『大声ダイヤモンド』位までは苦しかったが頑張って継続した、その結果が今日だ、とよく言われます。継続は力なりと信じて諦めなかった。他方、『秋元康の仕事学』で、「壁を乗り越えるな」ということも仰っています。

始めてみて、やはりこれはどうにもならない壁だ、と初めて気づくこともあるはずです。そのような時、立ち止まらずにジタバタする、そして、結局、転進、撤退することもやむをえない場合もあると思うのです。人生での失敗への対応をどうお考えでしょうか。

▶**秋元** 僕は失敗しようが何しようがその瞬間の判断力を研ぎ澄ますことの方が大事だと思っています。失敗したときになぜ失敗した、と原因を辿るのではなくて、失敗して、次に何が起きるのかというヒントを探ることなんだと思います。

僕は講演会で、人生はデッサンのようだと言っています。一本の線で写生することは出来ない。りんごなり、バナナなりの静物画を一本の0.5mmの極細のボールペンで描こうと思っても描けないでしょ。だけど、4B、5Bの柔らかい鉛筆で何本もの線を描いていけば、何となく輪郭がとれる。これが人生であり、色んな壁の答えだと思うんです。だから、僕ももしかしたら、人生で一本だけを極細のペンだけで描いていたら、開成中学に落ちたこの瞬間に終わっているんですよ。でも、開成中学に落ちたって、そうかあ、これじゃだめだと思って、いずれ東大文Iに行けばいいかっていうのがもう1本の線。でも、その途中でニッポン放送に遊びにおいでよって誘われたのが3本目の線。何本も何本も描いてやっていくうちに幸か不幸か、良いのか悪いのか分からないけれど、自分の人生をつくっていたんですよ。失敗と思うよりもデッサンのうちの1つの線を描いたと思えば、失敗なんて何てことはないと思うんですよ。

▶**神田** 秋元さんのビジネスは成功づくめのように見受けられますが、これは壁だなということで転身、撤退されたことはおありですか。

▶**秋元** そりゃありますよ。例えば、会社経営は向いてないなと思います。10社くらいつくりましたが潰したし、でもそれは失敗ではなくて、その中から学ぶことによって、次のこれが答えだというのはありますね。例えば、ジョージ・ルーカス・フィルムとかPixarのようなファクトリーがあって、こういうものを創るんだという時に、皆で創ろうというのがない駄目かなと思って会社を立ち上げたんですけど、僕は統率力も会社経営の才能もなく、会社をやめ、個人商店つまり僕が書くしかないんだと思いました。ファクトリーの時は、僕が企画をして、設計図を説明して、そ



こにいる脚本家、監督みんなで作ったのですが、自分が書くしかないと思ったのが、『着信アリ』という映画で、原作が僕なんです。つまり、そういう紆余曲折があって、「まず、自分が書く」というのが答えでした。

▶**神田** それもポジティブに1つの材料としてしまおうですね。我々も学ばなきゃいけませんね。

秋元さんの御著作の中で一番薦めているのは『企画脳』なのですが、実は、幾つか疑問もあります。敢えてマーケティングリサーチなどをするのではなく、日常の中に転がっているヒントに付箋をつけて、企画のリュックサック（記憶庫）に放り込み、メモを取らず、忘却により重要な情報を蒸留するに任せ、必要な時にピックアップするというやり方は素晴らしいと思います。面白い発見を求めるあくなき知的好奇心で貪欲に蓄積していくことは賛成ですが、実際は、寧ろ24時間リサーチしているようなもので、凡人には真似しがたいところもあります。他方、メモも取らないのでは、先生並みの記憶力がないと肝心のものまで消えてしまいますし、将来のニーズは現時点では判らないので忘却による誤消去の危険はないのでしょうか。

▶**秋元** やっぱり忘却というのが人間の脳が一番良く出来ているところだと思うんです。例えば、どんどん記憶をして、インターネット上の情報みたいになると検索して引き出すのが大変じゃないでしょうか。だから、ちゃんと忘れることで、印象的なもの大事なもののしか思いだせないようにな

っていると思うんです。僕は色んなことに付箋を貼って記憶しようとしたり、目にとめてみたりしているんですが、実はそこでふるいにかけているんだと思います。勝手に忘れてしまうことは大したことはないと思うんです。だから、一生懸命メモをとったり、何か仕事に役立つこと、自分の成長に関係のあるものを見て、勉強になったというのは、サプリメントを飲んでいるようなものであんまり意味はない。その時は、何も考えずに面白い映画だったとか、同窓会で同級生とバカ話をして、その時はバカ話だと思っていたんだけど、後に良いヒントがあったなあと。忙しくて大変だと思うけど、妻の親戚の法事にでた時に、何かがあったとか。よく、作詞家になりたい人、小説家になりたい人、放送作家になりたい人、そういう人へのアドバイスとして、いっぱい本を読みなさい、いっぱい映画を観なさいと言うけれど、全然関係ないと思います。やっぱり、生活しているなかで、例えば、野菜スープを飲んでいる時に、βカロチン是人参で補われ、ビタミンCはこれだという事を考えながらではなくて、ああ美味しいスープだなあと飲んでいれば良いんだと思います。それが自然に栄養素となり、どこかで何かを描こうと思ったとき、ブロッコリーの緑っぽさ、人参のオレンジ色の綺麗さを思い出したりするんだと思うんですよね。

（クールジャパン）

▶**神田** 先程少し話が出ましたが、クールジャパンについても改めて御指導ください。これは、国内市場が人口減少等で限界のある日本の経済的発展だけでなく、日本文化が諸民族に敬愛されることが安全保障にも繋がり、極めて重要です。既にJKT48、SNH48で海外で勝負され、田原総一朗さんがジャカルタでの「超絶カワイイ」という日本語声援にそのパワーを見出し驚愕されています。そこで質問。

「リナックスのようなオープンソース」で新たな魅力を増殖していく戦略の場合、その成功のためにも、収益源を確保するためにも、「カルピスの原液」を創造するだけでなく、これを著作権等

で死守する必要もあるような気がします。勿論、著作権収入自体は限界があり、韓国のようにその背後で工業製品等売り込むということが戦略になるかもしれませんが。溝上幸伸さんは、『AKBビジネスを大成功させた7つの法則』で、16人×3チームといったフォーマット販売の結果、オリジナルに利益が入るし、偽物防止になると分析されていますが、よく判りません。

▶**秋元** 一番大事なのは時の流れです。時代っていうのは大きく流れている。勿論、JASRACの会員でもあるし、やっぱりちゃんと著作権は保護されないといけないと思っています。でも、まずはそれよりも日本のこの歌が好きだという人が増えることが大事だと思います。だから、AKBもインドネシアとか上海とか色々なところに行っています。そこで「利益どうなってるんですか」と聞かれることがあります。利益なんてまだ出ない。それでもいいんだと思っています。そこでどうやったら利益が回収出来て、ある種の事業計画なんて考えたなら何もできない。でも必ず人が集まる、みんなが口ずさむ、そこから何かが始まるんだというのが持論なんです。AKBとクールジャパンは別物だと思っています。AKBが人を集めて、あるいは話題になって、そしたら、日本っていうのは凄い国だと。日本のAKBが好きなんだっていったら、そこにのった企業が何かそこでやればいいし、それがあつた種の文化戦略だと思います。人が集まるっていうのはすごく原始的ですが、それが一番力を持っているんですよ。まず人が集まり話題になる。それがあつてから法の整備をしないといけないし、必然になっていくと思うんです。まだ何もないところからやろうとするのはなかなか難しいんじゃないかなと思います。

▶**神田** 問題なのは偽物の話は、お金の話だけではなく、本物が汚されるレピュテーションリスクの問題もあります。

▶**秋元** もちろんその話があります。しかし、規制したからといって無くなるかというと無くなら

ない。

本当かどうか分からないので書いていいか分からないですが、ダチョウ倶楽部というお笑い3人組の「つかみはOK」という言葉が日本中に流行ったんです。でも、それが著作権のロイヤルティが入ってくるわけではない。志村けんさんに、「志村さん、僕らこんな流行語作ったのに全然お金入ってこないんですよ。著作権、ロイヤルティって貰えないんですかね？」って尋ねたところ、「バカだなあ。ロイヤルティがないからみんなが使ってくれるんだよ」と返されたそうです。これも真意だと思うんです。やはり、もっと好きになってもらうためには、敷居を低くしないといけない。そこで本当に良かったら使って頂くということをもっと文化でもできないかと思うんです。それを言うともた誤解されるから嫌なんですけれども、始めからハードルを上げて、すごく高い入場料が設定されて、勿論それだけのことがある内容だとする。でもその入場料に手が届かない方がいる。そこで、損でも良いから9割をこちらで負担しましょう、1割だけ入場料として頂きましょうというて、観てくださった方が感動したり、面白いと言ってくれば、リピーターになるし広がっていきます。AKBなんかが正にそうで、スタンディングが500円、着席は1,000円だったんですよ。劇場は250人のキャパなので、満員でも25万円にもならない。スタッフは50人以上いましたから、日当を支払っただけでも絶対赤字だし、その他にも色々なことがあつて赤字なんですね。でもそこで1,000円だから観に行こうと思ってくれた人がいっぱい居てくれたことがやっぱりリピーターを増やしたと思います。

▶**神田** 文化・芸術のパワーを立証した実例として、大震災の被災地でAKBをはじめ、芸術家やスポーツ選手の方々がボランティアで活動して下さったことが、苦境にある方々に元気を出して頂く上で、政府の支援よりも圧倒的にインパクトがあったという話が屢々、被災者から聞こえます。地域活性化やインテグリティ形成でも一つの鍵になるのではないのでしょうか。

▶秋元 僕の思いは、昭和30年代、あんなにもメイドインジャパンが強くて、どこに行っても「お前ソニーを持っているのか」、「トヨタに乗っているのか」と言われたことがあって、それをもう一度残したいだけなんです。だから、教育を考えなきゃいけないと……。とにかくこの日本がアジアで、まずアジアで勝つためにはどうしたらいいかと。日本の、人と違うと白い目で見られる習慣とか団結力とかをどう考えたらいいのだろうか。

地域の話ですが、実は、AKBがホームを作っているのはそういうことで、博多は博多で、難波は難波で、栄は栄で、そこで固まっているわけです。そこに、サッカーのサポーターのように集まってくれば、やっぱり故郷を愛するということは祖国を愛することになっていくと思います。先程大震災の話の時にも言いましたが、たかだかアイドルということがポイントなんです。たかだかアイドルがここまで国を想って頑張っているんだから、もっと偉い人とか、もっと知的な人とか、もっとお金を持っている人とか、もっと力のある人はちゃんとやろうよということなんです。僕も女川に行きましたけれども、とても寒かった。AKBの女の子はステージ衣装で、それで1時間も歌って踊って、それを寒い中嬉しそうな顔で見ている子どもたちを見ていると、胸が熱くなって何がどうであれ、僕達は信じることをやろうと。

▶神田 私達公務員も必死で頑張らないといけないと思います。さて、クールジャパンでドリームチーム、7人の侍の先生のアイデアは素晴らしいと思いますが、これを普通のやり方でやってしまうと、それぞれの業界の代表の予定調和になってしましますが、どうしたらよいのでしょうか。

▶秋元 “北風と太陽”です。旅人のコートを脱がそうと思って北風が吹きつけていては、余計に衿を合わせてしまいます。太陽がポカポカ照らせばいい。コンテンツも同じ。まず、面白いものを作れば人が笑顔になる。そこからすべてが広がっていくと思います。

（秋元康という人間学）

▶神田 秋元さんの本で一番好きなのは『趣味力』です。年をとるにつれて初めてのことがなくなるから、初めてのこと、それも自分にとって楽しいことを始めて錆び付いた感覚を研ぎ澄ませようという命題は素晴らしい。実は私が財務省人事をやっていた時も、職員に趣味の重要性を説いていました。今は乱世です。これまでの秩序が溶解し、既存の知識が役に立たないことが増えています。そうすると、歴史や哲学で大局的な視座を得ることと共に、仕事と異なる環境、つまり、ビジネスに直結しない本、仕事直結関係以外の人、文化やスポーツなど霞が関以外の場所に少しでも触れることが、新たな発想を得る機会になるだけでなく、異次元の刺激が脳を活性化させます。もっとも結果的に圧倒的に人生の時間を割くのは仕事関係になりますが、それは当然の前提です。

ところで、先生の本の中で、今の時代は社会を変えるというのはなかなか難しいので、自分の人生を充実させようという時代だと記されていますが、他方で、日本という国は少子高齢化で、激しい国際競争にも晒され、古今東西未曾有の財政赤字を積み上げ、国民みんな最低限の危機感を持って改革しないと破綻してしまう。それだけ厳しい状況なので、趣味で脳みそを活性化させないといけない、あるいは、異分野の知識も仕事に有益であり、仕事をやらずに趣味をやるのではなくて、趣味をやる仕事に生きるということをもう少し強調してもいいのではないかと思います。その辺はどうお考えですか。

▶秋元 オーバーなことを言うと、日本みたいな戦後裕福になった国において何のために生きるか、そこだと思うのです。それは何のためかということは考えず、生きるために生きるという時代になって、それからさらに今は何のために生きるんだらうということになった。例えば、僕の父は高度経済成長時代のサラリーマンだったので、彼らは働くということが何よりも生きる目的だったんですね。それから落ち着いて、さあ我々は今何のために生きるんだらうとなる。例えば、仕事は

家族のため、あるいは自分が生活するための手段だと割り切って、サーフィンだけをやっている人もいる。仕事なんてたかがお金を貰うためだけのものと割り切って、自分のやりたいことをやる。それも素晴らしいと思う。他方で、趣味を仕事にした人、僕はこれに近いんですが、そういうものもある。あとやっぱりもうひとつは、仕事は仕事で楽しい、というものもある。仕事で楽しいというのは言い方を変えと、時間を捨てないということですよね。例えば、仕事は生活する手段でお金を稼ぐ手段だという人は、労働時間の8時間は捨てていることになってしまう。もったいないと思うでしょう。でも僕は仕事の8時間も、趣味の2時間も、家族と話す時間も楽しいのが一番幸せだと思います。だから僕は1日のなかで何をしているときに楽しいと思うかは人それぞれだと思うんです。仕事で楽しいと思う人が23時まで残業していてもそれは楽しいんです。傍でみると毎日大変だねと言う人がいるけれども、23時でも楽しい人もいます。AKBは5年間くらい売れなかったので、「秋元さん大変でしたね」、「ほんとよく頑張りましたね」って言う人がいるんですが、全然大変ではなかったんです。お金が入らないのに何十曲も何百曲も書き続けていた姿が人からみると大変だとか、つらそうに見えていたんですが、本人は楽しいんです。ですから趣味とは何ぞやというと、人生における楽しい時間のことでしょ。

▶**神田** なるほどその定義にすればいいのですね。

さて、秋元康が今の時代を捉えて、うまく嵌まっているという話がある一方で、私の世代からすると『ドラマティック・レイン』も今でも活きているし、『川の流れるように』は恐らく永遠に生き残るでしょう。そこで先生はご自分の作品でどんなものが長い歴史のなかで残ってほしいとお考えでしょうか。

▶**秋元** やはり『川の流れるように』でしょうか。1975年の夏、そこで参考書を開いたままアルバイトをし始めて、そこから浮遊した秋元康という人

の人生を夢の中で見ているような人生です。ニッポン放送に行き、ラジオの台本を書いて、『ザ・ベストテン』とかテレビの台本を書いて、たまたま書いた詞が『ドラマティック・レイン』や『GOOD-BYE青春』でヒットして、おニャン子クラブや小泉今日子やそういうアイドルブームをつくっている人生になった。その間、職業はずっと放送作家だったんですけども、自分の職業に自信がなかった。僕達の職業は国家資格があるわけでもないし、免許事業でもないから、自称でしかない。自称というのは自己評価することですから恥ずかしい。自称作詞家といっても、周りの人は作詞家じゃないと思っている、そういう肩書に対する逡巡があつて名乗らなかつた。でも、あのディーバである日本の歌姫の美空ひばりさんが、あなたは作詞家よ、と認知して下さったのが『川の流れるように』だと思うんです。だから、僕はその時を境に肩書きを作詞家としているんです。美空ひばりさんが歌ってくれた、認めてくれた、というのは、僕の人生にとってかなり大きいですね。あの日から、大学を受け直すことを本当に止めたと思っている。家族、親戚のなかで、芸能関係者や音楽関係者あるいはテレビ関係者が誰もいない環境の中で、たまたま書いた台本が面白いからといって、誰もそれが続くとは思わないんじゃないですか。早くこのアルバイトを辞めて、就職しようかとも思っていたのです。そういう意味では自分にとって『川の流れるように』は何かを吹っ切れた曲、ターニングポイントなんです。

もう一つ教えてくれたのは、ヒット曲は狙えるがスタンダードナンバーは狙えないってことです。スタンダードナンバーは結果ですから。AKBでヒット曲は狙えても、あるいは作れたとしても、それが30年後も50年後も歌われているかは判らない。少なくとも25年近い日々が流れて、『川の流れるように』が今なお歌われているということで初めてスタンダードナンバーになったんですよ。

▶**神田** 先生の概念でいうと、ヒットは今の流行のクリームのところに乗っていて、おそらくスポ

ンジにしみこむ部分がスタンダードナンバーでしょう。

▶**秋元** それが多分日本人の琴線に触れるということでしょう。つまり、日本人が好きなメロディがあって、好きな世界があって、だから、そこがヒットということだと思います。

▶**神田** 私は秋元さんの『象の背中』の主人公と同じ48歳です。幕末の志士はとっくの前に殆ど死んでいる年です。芸能界を含め、社会全体に人類未曾有の変化を齎している主因の中に、IT革命が激化させたグローバリゼーションと少子高齢化があります。我が国は近々、人口の4割が65歳以上になりますが、その時のエンターテインメントはどのような姿になっているのでしょうか。

▶**秋元** 判らないですね。インドネシアは人口の何割かは10代、20代ですごく若い国じゃないですか。でも、僕は日本に何も憂いていないし、結局そうやって国は続く、人は続くんですよ。例えば、活字離れた若者とかと言われますが、活字離れた若者がそのまま白痴化していくことはなくて、活字離れて違うことで知識を得たり、あるいはそこで議論するようになると思うし、高齢化社会になっても高齢化社会のなかでまた住み良い日本をつくるだろうし。高齢化社会の中で今度はずっと若い力がなきゃいけないということになり、その反作用が国の若返りになって、昔のようないっぱい子ども産もうという時代になるのかもしれないし。ただ、やっぱり今の若い世代は何も持たない、手ぶら主義みたいな考え方があると思うんです。だから、自分の子どもに対しても、昔みたいに子どもが4人、5人というよりも、1人あるいはいない方が楽かもしれないという考え方が蔓延しているんじゃないかな。

▶**神田** 小林よしのりさん達の共著『AKB白熱論争』において、AKBは公共性を育てているという指摘があります。我が国の公共心の衰退が悲観される中で、素直に、みんなのために何か出来たら

いいなとか嬉しいなとか、秋元精神を若い子どもたちが肉体化をある程度しているから共感を得ているところがあるのでしょうか。教育論をもう一言。

▶**秋元** 共感はあるんだけど難しい。教育ですが、まず先生たちを指導しつつ、それが生徒たちにいくまでのリレーを考えると、すごく難しいのは競争原理でやっているところです。僕が一番教えているのは人と比較するな、チャンスの順番が来るんだということです。なぜなら、運というのは太陽みたいなもので角度を変える。だからみんなはそこにある「種」なんだと。陽の具合でこっちは発育が良くて、こっちは遅い場合もある。AKBの場合で言えば、後輩なのに最近テレビに出て凄い人気が出たという子もいれば、私はテレビにも出られないしと憂う子もいるんですよ。そうじゃないんだと。テレビに出ないってことで、その分時間があつたのでアニメの声優をやったらそこで人気が出るっていう場合もあるんですよ。だけど、やっぱりメンバーたちは不安だから隣を見る。私の方がちょっと成長が遅い、例えば背が低いということを比較してしまうところがある。同じ夢に向かって走っているAKBですらそうなのだから、一般の小学、中学、高校の子たちは、すごく頭のいい子、足の速い子、色々あって、そういう人間関係が大変だと思います。ただ、AKBは少なくとも運命共同体なので不祥事を起こしたら、自分たちの責任で自分たちの人気落ちるのが判るから、そこには世間で騒がれているようなイジメとかは全くないんです。だけど、これが一般的な学校だと大変だなと思いますよ。僕は、京都造形芸術大学の副学長をやっていたんですけども、ちょっとしたことを変えるとか、こうしたらどうとかになると、すごく厳しいですね。日本の教育は素晴らしいと思いますし、教育者もみんな優秀だと思うんですけど、バランスの悪い才能の育て方をどうするか、ですね。

▶**神田** やはり、人生の進み方、ひいては価値観を多様化すべきだと思います。勉強で頑張る人は

徹底的に勉強したらいいが、それが皆に得策とは限らない。例えば、別に大学行かなくても、早く社会に出て大卒よりも社会に貢献できる人もいるし、勉強したくなったら大学に戻ればいい。専門学校でも素晴らしい学校が増えている。実際、手に即戦力ある職がつく専門学校の方が就職率が良かったりする。いい大学に入って大企業に入るという単線的モデルは少なからずの人に合理的な選択ではなくなってきています。もう少し日本を多様化できないものかと思いますが。

▶秋元 それはやっぱり、趣味力がないからでしょう。中学、高校で受験に追われると、そこで趣味力を失ってしまうんだと思うんですね。

▶神田 専門学校や高専の学生の多くは目が輝いているんですね。将来成功するか分からないけれど、とりあえずこれを自分はやりたいんだということできているから。

▶秋元 夢はね、絶対叶うんですよ。絶対女優になりたいと思えば、女優になれるんですよ。ただ、フジテレビの月9の主演女優になれる人は全体の0.1%です。2時間ドラマのちょっとした役で出られる人が1%。最後の最後は、女優で飯は食って

いけないけれど、3ヶ月に一回みんなで公演をして、チケットを手売りして普段はバイトしていますというのも女優なんです。女優という演技をすることで楽しいと思う時間を過ごせる。また、夢はカメラマンになりたいといって、個展で一枚が高額で売れるようなカメラマンになれるかもしれないし、あるいは学校で生徒たちに喜ばれながら、学校指定のカメラマンになれるかもしれないし、日頃は違う仕事をしているんだけど、休みが取れるたびに島の写真を撮りに行く人もいるかもしれない。このようにその夢は叶うんだということを、人生一方向じゃないということをどれだけ捉えられるかですね。

▶神田 本日は大変に貴重なお話を拝聴させて頂き、誠に有難うございました。

(この対談は24年4月5日に収録された。)

本シリーズバックナンバー (23年分は拙著「強い文教、強い科学技術に向けて」(霞出版社)に所収)

23年	4月号	濱田純一	東京大学総長(国立大学協会会長)
		野依良治	理化学研究所理事長(ノーベル化学賞)
	5月号	清家篤	慶應義塾塾長(日本私立大学連盟会長)
		山中伸哉	京都大学教授(京都大学iPS細胞研究所長、ノーベル生理学・医学賞)
	6月号	藤原和博	東京学芸大学客員教授(大阪府知事特別顧問)
	7月号	宮田亮平	東京藝術大学学長(金工作家)
	8月号	白石隆	政策研究大学院大学学長(総合科学技術会議議員)
		中村紘子	ピアニスト
	9月号	福田富昭	日本オリンピック委員会副会長(日本レスリング協会会長)
		苅谷剛彦	オックスフォード大学教授
	10月号	三村明夫	新日本製鐵会長(中央教育審議会会長、前日本経団連副会長)
24年		小林誠	日本学術振興会学術システム研究センター所長(ノーベル物理学賞)
	11月号	三遊亭円楽	落語家
	5月号	鎌田薫	早稲田大学総長(法科大学院協会理事長)
	6月号	葛西敬之	JR東海代表取締役会長
	7月号	陰山英男	大阪府教育委員会委員長(立命館大学教授)
	8月号	毛利衛	日本科学未来館館長(宇宙飛行士)
	9月号	大沼淳	文化学園理事長(日本私立大学協会会長)
	10月号	松本紘	京都大学総長
	11月号	山下泰裕	東海大学副学長(オリンピック金メダリスト)